

二〇二二年度 一般選抜Ⅰ期 問題

国 語

実施日 二〇二二年二月二日（土）

注意事項

1. 問題はⅠからⅡまであり、8ページまで印刷してあります。
2. 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入してください。
3. 問題の都合上、本文を改めた部分があります。

札幌大谷大学社会学部地域社会学科

【I】次の「i」「ii」の文章は太田肇「なぜ日本社会はこれほど窮屈なのか」(『同調圧力の正体』PHP新書、二〇二一年)の一部である。二つの文章を読み、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文を一部省略改変した箇所がある)。

「i」 集団(組織を含む)は大きく二種類に分けることができる。一つは家族やムラのように自然発生的で情によってつながる集団であり、「基礎集団」と呼ばれる。もう一つは特定の目的を追求するためにつくられた集団であり、「目的集団」と呼ばれる。(中略)大まかにいえば、ここでの基礎集団は「共同体」、目的集団は「組織」に相当する。

この分類に従うなら、企業はもちろん、学校やPTA、それに政党や競技団体などはいずれも具体的な目的を達成するために設けられたものだから、組織(目的集団)であるはずだ。

ところが日本では、典型的な組織であるはずの企業でさえ共同体のような性質を併せ持っている。正社員になれば会社の一員として身分が保障され、終身^①コウウ制と年功序列制のもとではまじめに働いていれば給与と職位がほぼ自動的に上がり続ける。また独身寮や社宅、各種手当、年金など手厚い福利厚生によって家族ともども安定した生活を送ることができた。

制度だけではない。少し前までは社員の結婚や家族の葬式といった私的なイベントまで、同僚社員が手伝うのが当たり前だった。中小企業になると会社への^②チュウセイと献身を求めるいっぽうで、社員をしばしば自宅に呼んで食事を振る舞うなど、まるで家族のように扱う経営者も少なくなかった。

要するに正社員になれば会社の一員として全人格的に取り込まれるわけであり、そのようなコウウ形態が「^{注1}メンバーシップ型」と称されるゆえんである。

学校でも子どもたちは常に集団で行動することが重視され、休み時間までみんな一緒に一輪車に乗ったり、縄跳びをしたりするよう^③促される。そして授業だけでなくクラブ活動や^④ソウジ、給食なども教育の一環と位置づけられ、子どもの家庭環境に応じたケアをするなど生活面にまで学校が深く関わってきた。

会社や学校以外の組織にも同じような特徴がみられる。たとえばPTA(Parent-Teacher Association)はその名のとおり本来はアソシエーション、すなわち目的集団であるはずだが、実際には各種の^⑤親睦行事を催したり、集まって一緒に活動することに価値をおいたりする傾向がみられる。

(中略)

そのほかにも本来は組織であるにもかかわらず、実際には共同体としての特徴を備えた「疑似共同体」がたくさん存在する。日本では一般論として、「組織が共同体化する」といえるかもしれない。

「ii」「i」で述べたように、^A日本の組織は共同体化しやすい。共同体化した組織を私は「共同体型組織」と呼んでいる。共同体型組織は一見するとメンバーにとつてやさしい。典型的な官僚制組織のようにいきなりルールを【a】にとつて強制したり、取り締まっ

たりしない。ときにはルールに違反しても見逃されることがある。

コロナ禍のもとにおける国や自治体の対応にも、そのような姿勢があらわれていた。二〇二〇年の春から夏にかけて新型コロナウイルスが世界に蔓延し、感染者が急増したとき、欧米など海外の国々は次々とロックダウンに踏み切った。そして、外出制限に違反した者には罰金を

【 b 】すなど強硬な措置をとった。

^Bそれに対し日本では、緊急事態宣言を出した際にも欧米のような強制ではなく、店舗には営業の自粛を、国民にはいわゆる「三密」を避けることを要請するなど、「お願い」ベースで対処した。(中略)

しかし、それはあくまでも一面に過ぎない。裏側には組織としてのルールや権限が厳然と備わっていることを見逃してはいけぬ。かりにルールや権限が存在しなくても、ソフト路線が行き詰まったときにルールをつくれればよい。つまり、いざとなれば【 c 】【 面の顔があらわれるのである。たとえていうなら「衣」の下に「鎧」をまとっているようなものだ。

【 c 】面の顔があらわれればよい。つまり、いざとなれば【 c 】

だったら、なぜ最初から規則を前面に出さないのか？
その理由としてまずあげられるのは、容易に想像できるように強制力を行使しないほうが相手の反発が小さいことだ。訴訟のリスクも免れる。つまり本来は組織が担うべき責任を共同体の自助努力(当然ながらそこでも同調圧力が働く)に転嫁できるわけである。したがって権力者にとつては、可能なかぎりその行使を控えたほうが得だという計算が働く。

しかし、もっと重要な理由がある。注目したいのはリーダーの発言だ。職場で上司が部下に、学校で教師が生徒に、首長が住民に何かを働きかけるとき、日本では「○○しなさい」という命令調ではなく、「○○しましょう」といった誘いの形がとられる。それは自分と相手がある意味で対等な立場、すなわち同じ共同体のメンバーだと意識させることによって、相手からいつそう大きな貢献や譲歩を引き出せるからである。文脈はやや異なるが、コンフリクト(争い)への対応について、組織学者のJ・G・マーチとH・A・サイモンはつぎのように述べている。少々難解なので、かみ砕いて説明しよう。

当事者の利害が根本的に対立するときは「バーゲニング」(取引)や「政治的工作」の方法が、いっぽう根っ子の部分で一致しているときは「問題解決」や「説得」の方法が適している。しかしバーゲニングや政治的工作の方法をとれば、双方の利害が対立していると認めてしまうことになる。そうすると、組織はより有利なコントロールの手法を用いることができない。そのため組織はたいいていの場合、根本的には利害が一致しているとみなして問題解決や説得の方法をとろうとする。

コンフリクトが生じているか否かにかかわらず、実際に運命共同体であること、すなわち双方の利害が一致していることを持ち出すのはたいいてい組織の側、あるいは管理職、教師、親といった上位者の側である。それによつて従業員、生徒、子から自発的な服従と超過的な貢献を引き出せると考えるからである。たとえば親と子の意見が対立したとき「家族なので譲り合おう」と説得するのはたいいてい親のほうで、「価値観が違うから放っておいて」というのは子のほうだ。

このように利害を共有する共同体のメンバーだという建前をとることで、組織は超過的な貢献を要求することができる。

(中略)

新型コロナウイルスへの対応にしても、政府は当初から飲食店などには営業禁止などの強制措置をとらず、強制力のない休業要請という手段で臨んだ。そのため休業補償という形ではなく、協力の金で済ませられた。また欧米に比べて感染者も死亡者も少ないにもかかわらず、地方の知事が「うちの県には来ないでほしい」とか、「帰省しないでほしい」「不要不急の外出は慎んで」と県内外の人に呼びかけた。法律や条例ならとてもそこまで要求することはできない。さらに「自粛してください」ではなく、「自粛しましょう」と対等な立場で呼びかけたのも、同じ共同体のメンバーとして利害を共有する前提に立とうとするからである。

しかし、ここでつけ加えておかなければならないことがある。前述したように、かりに圧力が通用しなかった場合、**「衣」の下から「鎧」が顔を出す**。その「鎧」すなわち「自主的」な強制力を担保するのはしっかりと用意されている。ただ共同体意識にうったえているだけではないのだ。

(中略)

そうした**「柔」と「剛」**二段構えの政策が顕著にあらわれたのが、二〇二〇年の末ごろからやってきた新型コロナウイルスの第三波である。いわゆる「自粛疲れ」した国民や、利益をあげなければ生き残れない飲食店の経営者は、緊急事態宣言を出しても以前のように自粛しなくなった。そこで政府は方針を転換して特別措置法と感染症法を改正し、正当な理由なく営業時間短縮や休業の命令に従わない店舗や、入院を拒む感染者には過料という罰則を**【 b 】**することができるようにした。

行政としては二段構えの政策をなんとしても維持したい。そのため「衣」を破ろうとする者には「鎧」があることをみせつける必要がある。二度目の緊急事態宣言が解除された直後の二〇二二年三月、飲食店グループのグローバルダイニングが時短命令を出した東京都を相手に起こした損害賠償請求の訴訟は、それを強く印象づけるものだった。ほとんどの飲食店が渋々営業を自粛するか、「違反」しても行政が**【 d 】**こぼしできる程度にとどめていたのに対し、同社の経営者は時短営業に従わないことを自ら公表し、自粛依存の政策を真っ向から批判した。店舗数や発言力などからみても、その社会的影響力は無視できないほど大きい。したがって行政の立場からすると「違反」を放置したら自粛している店舗に示しがつかなくなり、営業自粛の要請という手段が使えなくなる恐れがある。そのため同社に対しては、時短命令という厳しい措置に踏み切らざるをえなかったのだと推察される。

会社や役所の中でも内部告発をしたり、職場の慣行を公然と無視したりする者に対してとりわけ厳しい態度をとるのは、そうしなければ「衣」に当たる部分、すなわち共同体の同調圧力によって得られるメリットを失いかねないからだ。

要するに、共同体の圧力による自発的な協力要請と、公式組織の力による強制という二段構えの手段を備えた日本式の共同体型組織は、最初から強制に頼る欧米式の組織に比べて一見すると弱腰なようだが、実はより強力だといえる。だからこそ組織は、なんとしてもその体制を守ろうとするのである。

(注1)メンバーシップ型——独立行政法人労働政策研究・研修機構研究所長の濱口桂一郎が日本型コヨウシステムの特徴を説明する概念として提示しているもの。仕事をきちんと決めておいてそれに人を当てはめる欧米諸国に対して、人を中心にして管理が行われ、人と仕事の結びつきはできるだけ自由に変えられるようにしておくのが日本の特徴だとされている。濱口は前者を「ジョブ型」、後者を「メンバーシップ型」という概念で説明している。

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 【 a 】 ～ 【 d 】 に最適な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号を記しなさい (同一記号の反復使用不可)。

ア 科 イ 体 ウ 目 エ 器 オ 英 カ 盾 キ 強

問三 傍線部A「日本の組織は共同体化しやすい」とはどういうことか。「 i 」の内容を踏まえて説明しなさい。

問四 傍線部Bとあるが、「日本」では「欧米のような強制」ではなく「お願い」ベースで対処した」のはなぜか。その理由を65字以内で二つ記しなさい。

問五 傍線部C「衣」の下から「鎧」が顔を出す」とあるが、次のア～オは「衣」と「鎧」のどちらに当てはまるか。「衣」の場合にはaを、「鎧」の場合にはbをそれぞれ記しなさい。

ア 組織としてのルールや権限
イ 利害が一致しているとみなして問題解決や説得の方法を採用する
ウ 強制力のない休業要請という手段
エ 過料という罰則
オ 時短命令という厳しい措置

問六 傍線部D「柔」と「剛」二段構えの政策」の内容を説明している40字の箇所を本文中から抜き出し、最初と最後の5字を記しなさい (句読点等も字数に含める)。

Ⅱ 次の文章は中島岳志「利他はどこからやってくるのか」(『「利他」とは何か』集英社新書、二〇二一年)の一部である。本文を読み、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文を一部省略改変した箇所がある)。

志賀直哉の「小僧の神様」という小説を読んだことはありませんでしょうか。この小説のテーマは利他という問題と深く関わっています。発表は、日本がスペイン風邪第二波に直面していた一九二〇年一月。一〇〇年前のパンデミックのさなかに、志賀直哉は利他の問題を考えていたのです。

この作品では、秤屋さん^{はかりや}で働いている小僧の仙吉が、お使いの帰り道で寿司^{すし}の屋台を目にし、どうしても寿司を食べたいという、抑えがたい^①シヨウドウにかられます。勇気を奮^②って、屋台に入り、目の前の台に置かれているマグロの寿司を食べようと、「慣れたふうな手つきでふつとつかみます。しかし、つかんだ瞬間に主人から「一つ六銭だよ」と言われる。ポケットには四銭しか入っていません。仙吉は、つかんだマグロの寿司をまた台の上にかえし、すぐに屋台を出ていったのです。

その状況をちやうど屋台で見ていたのが、若い貴族院議員のAです。Aは、仙吉の様子について、別の日に友人のBとこんな会話をします。

「何だか可哀想^{かわいそう}だった。どうかしてやりたいような気がしたよ」といった。

「御馳走^{ごちそう}してやればいいのに。いくらでも、食べるだけ食わせてやるといったら、さぞ喜んだろう」

「小僧は喜んだろうが、こっちが冷汗^{あせ}ものだ」

「冷汗？ つまり勇気がないんだ」

「勇気かどうか知らないが、ともかくそういう勇気はちよつと出せない。直ぐ^す一緒に出て他所^{よそ}で御馳走するなら、まだやれるかも知れないが」

『小僧の神様 他十篇』

Aは、このとき勇気が出ずにとつきの行動が起こせなかった。けれども、非常に強い同情心が湧き、どうかしてやりたいというふうに思った、ということ^③をBに語っているわけです。

そして後日、Aが体量秤^{りやうりやう}を求めて秤屋に行ってみると、偶然、小僧として働かされている仙吉に再会します。仙吉のほうはAを認識していませんが、Aは、このあいだ奢^{おご}ってやれなかったから今日はご馳走^{ちそう}してやろう、と考えます。

秤を運搬用の台車に載せて仙吉に運ばせ、人力車に載せかえたところで、Aは「お前も御苦労。お前には何か御馳走してあげたいからその辺

まで一緒においで」と言っ、そこから少し離れた横町の小さな寿司屋につれて行きます。

寿司屋の前で仙吉を待たせ、Aはひとりでお店に入っ、店の人にポンと金を渡して、店の外に出る。そして仙吉に、私は先に帰るから、ここで寿司をたらふく食べておいでと伝えます。仙吉は店に入り、本当にお腹いっぱい、三人前の寿司を食べて、そして恥ずかしそうに店の人に札をして帰りました。

この後、Aはこれであるときの思いを果たせてほっとするかというと、むしろ逆の気持ちが湧き上がってきます。名前が仙吉にばれないように、店の台帳には「ギメイを書き込み、議員として施したのではない」という「体裁も整えたの」です。

ここで志賀直哉は、「変に淋しい気持」とAの心情を表現しています。

Aは変に淋しい気がした。自分は先の日小僧の気の毒な様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、こうもしてやりたいと考えていた事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していいはずだ。人を喜ばす事は悪い事ではない。

自分は当然、ある喜びを感じていいわけだ。ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持は。何故だろう。何から来るのだろう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通っている。

もしかしたら、自分のした事が善事だという変な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られているのが、こうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？

(同前)

最後は疑問符で終わっています。そして彼がこの気持ちを妻に打ち明けると、妻も、そのなんとも落ち着かない気持ちが分かつ、と言うのです。Aは、小僧の仙吉に何とかしてあげたいと思つて、贈与という利他的な行為をした。しかしその贈与によつて、逆に非常にいやな気持ちに苛まれるようになった。

いくら尊厳を持つて行つた「ジヒ」であつても、その行為が行われた後に「いやな気持」が行為者に残る。ここに、利他や贈与の謎の核心が表現されています。

一方、仙吉は、Aの存在について非常に不思議な気持ちになつて、次第に神様、あるいはお稲荷さんがやつてくれた行為かもしれないと思ひ始めます。そして、この小説でいちばんよく議論されるのは最後のシーンです。志賀直哉は、この小説をすごく変な終わらせ方をします。最後のところで仙吉は、いつかまたあのお客さんが来てくれないかな、困つたときに自分の前に神様のようにあらわれてくれたらいいのに、と思うのですが、ここでふつと変な視点が入ります。

作者は此処で筆を擱く事にする。実は小僧が「あの客」の本体を確めた要求から、番頭に番地と名前を教えてもらって其処を尋ねて行く事を書こうと思った。小僧は其処へ行つて見た。ところが、その番地には人の住いがなくて、小さい稲荷の祠があった。小僧は吃驚した。——とこういう風に書こうと思った。しかしそう書く事は小僧に対し少し残酷な気がして来た。それ故作者は前の所で擱筆する事にした。

(同前)

なぜ志賀直哉はこんなシーンを最後に入れたのか。Aは出鱈目の番地と名前を伝えてある。仙吉がどうしてもその正体を知りたくてそこへ行ってみると、お稲荷さんがある。このようにして仙吉に、やっぱり神様なんだ、と思わせるのは、仙吉に対して非常に気の毒な気がしたのでここで筆をおくことにした、と書いています。ここにも非常におもしろいテーマがあると思います。

単純に贈与をすれば、利他なのか。果たして利他とはいったい何なのか。利他の典型ともいえる贈与にはどのような困難が伴うのか。ここには、^{iv}「筋縄ではいかない深い問題が横たわっています」。

^v「コロナ危機のなかで、「利他」や「贈与」に関心が集まっています。たとえば、ちょっとした感謝を伝える手段として「eギフト」に注目が集まりました。相手に直接会わず、郵便や宅配便も使わずに、スマホでできるちょっとしたギフトです。「eギフト」は若者を中心に、コロナ危機前の約五倍に規模を拡大しました。読者の方にも、これまで大切にしてきた店を守りたいと考えて、クラウドファンディングなどに参加した人も多くいるのではないのでしょうか。「利他」は、まさにこの現代で取り組むべき問題だと考えています」。

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直して記しなさい。

問二 傍線部Ⅰ「慣れたふうな手つき」には仙吉のどのような気持ちが表れているか。簡潔に説明しなさい。

問三 傍線部Ⅱ「体裁」を使って短文を作りなさい。

問四 傍線部Ⅲ「いやな気持」が行為者に残る」とあるが、それはなぜか。「贈与した側」「された側」という言葉を必ず用いて説明しなさい。

問五 傍線部Ⅳ「二筋縄ではいかない」に関する次の二つの問いに答えなさい。

(i) 「二筋縄」の読み方をひらがなで記しなさい。

(ii) 「二筋縄ではいかない」の意味を記しなさい。

問六 傍線部Ⅴ「コロナ危機のなかで、「利他」や「贈与」に関心が集まっています」とあるが、「コロナ危機のなか」で行われた「利他」や「贈与」に関する事例としてあなたが知っているものをあげ、それがどのような意味を持っていたか、あなたの考えを記しなさい。

2022 年度札幌大谷大学社会学部地域社会学科 一般選抜 I 期 国語 解答

一番 (50 点)

問一 ①雇用 ②忠誠 ③うなが ④掃除 ⑤しんぼく (2 点×5)

問二 a 力 b ア c キ d ウ (2 点×4)

問三 日本では、特定の目的を追求するためにつくられた集団であっても、メンバー同士が集まって一緒に活動し、情によってつながることに価値をおく傾向があるということ。(5 点)

問四 本来は組織が担うべき責任を共同体の自助努力に転嫁できるので、権力者にとって可能なかぎり強制力の行使を控えたほうが得だから。(61 字) (6 点)

利害を共有する共同体のメンバーだという建前をとることで、政府は国民から自発的な服従と超過的な貢献を引き出せると考えたから。(61 字) (6 点)

問五 ア b イ a ウ a エ b オ b (2 点×5)

問六 最初=共同体の圧 最後=構えの手段 (5 点)

二番 (50 点)

問一 ①衝動 ②ふる ③偽名 ④すいこう ⑤慈悲 (2 点×5)

問二 年齢の若い雇われ身分の自分だが、初めて寿司を食べるわけではないと誇示しようとする気持ち。(6 点)

問三 省略 (6 点)

問四 利他や贈与の行為は、誰かのためにと行って行ったとしても、そこには「贈与した側」と「された側」という関係が生じるため、一方が優越する立場になりかねない。贈与した側は見返りを求めず純粋な気持ちだったとしても、自分が相手より優位な立場 にいることを示してしまったといううしろめたさのような気持ちが存在してしまうから。(8 点)

問五 (i)ひとすじなわ (3 点)

(ii)普通のやり方では思い通りにいかない様子。(4 点)

問六 省略 (13 点)